

【タイトル】 人生はサバイバル！～大丈夫、人はみんな繋がっているよ～

【概要】

本企画は、人は誰しも赤ちゃんとして“オギャー”と生まれた瞬間から人生のサバイバルが始まることを、ストーリー仕立てのエピソードを交えてお伝えします。誰もが生まれた時から誰に教わるでもなく自分で呼吸をして、排泄もします。たった今、生まれたばかりなのに凄くと思いませんか？そう、僕たち私たちは、何だって出来る！何でも知っている！人生は勿論、楽なことばかりではありません。時に苦しく辛いことも起こります。悲しい涙もたくさんあります。それでも自分を信じて、勇気を持って人を信じて行動した時に、想像もしなかったような人生の展開が待っています。自分を生きることを出し出す、気づく、そんな一冊になったら嬉しいと思っています。

【想定する読者ターゲット】

- ① 10～30代の男女
- ② 家族、母との繋がり、両親の事情に悩む子供
- ③ 学生時代に小さな集団の中で、友人との距離感や信じることに悩む子供
- ④ 社会に出て、更に大きな組織や人間関係の中で自分の夢や希望を持ち続けたい人

【構成案】

第1章 お母さんとの繋がり

- ・へその緒で繋がる絆
- ・最初に成し遂げた偉業

第2章 僕の意味

- ・どんなこともやってみる
- ・言葉にして伝えてみてもいいんだ

第3章 小さな輪

- ・トイレ掃除だって楽しくなる
- ・人を疑うことも覚えていく

第4章 どうにもならない大人の事情

- ・両親が別々に暮らす選択
- ・僕の中のもう一人のボク（小っちゃな神様）

第5章 社会に出ると知らない世界が広がっていた

- ・人からもらう言葉たち
- ・自分から心を開いてみよう

最後に、今この瞬間、今日を諦めることなく生きてみよう！人生は今の繰り返しと括る

【サンプル原稿】

人生はサバイバル！～大丈夫、人はみんな繋がっているよ～

第1章 お母さんとの繋がり

赤ちゃんがオギャーと生まれた瞬間から人生のサバイバルは始まっている。それまで、お母さんのヘソの緒を通じて、呼吸も栄養も貰っていたのに、これからは自分で呼吸をして排泄もする。たった今、生まれたばかりの赤ちゃんなのに、それが出来るんです！凄いいと思いませんか？これは僕たちが最初に成し遂げた偉業です。

僕たちは、お母さんの子宮の中に小さな小さな命として宿してから、誰もが沢山の愛情を受けて生きて来ました。ひょっとしたら、お母さんはたった独りだったかもしれません。そうではなく、沢山の人がよろこび待ち望んでいたかもしれません。長い年月を経て授かったのかもしれない…。何れにしても、お母さんは10ヶ月以上もの間、自分のお腹の中の小さな命と一緒に育ててくれたのです。

この誕生の奇跡を大切に過ごしてくれたから今、僕たちはここに生きています。これは僕とお母さんの結びつき、人との最初の絆です。

第4章 どうにもならない大人の事情

僕が14歳になった頃、僕の両親は別々に暮らすことになった。まあまあ大人びた僕は平気なフリをしていたのかもしれない。それまで、とても仲の良い二人だったから、きっと直ぐに戻るだろうとも思っていた。しかも『離婚届』を僕に預けていた両親だから…本気ではないんだと都合よく解釈した。

僕と小さな弟は、お父さんと一緒に暮らすことになった。何としても小さな弟を守る責任のある僕は、立派なお兄ちゃんになった。本当は、2段ベッドで寝ている弟に気づかれないように、布団の中でそっと泣いていたんだけどね。

そして、お母さんに好きな人が現れたことも何となく気づいていたんだ、僕は。

とにかく毎日、もの凄く忙しい日々の始まりだった。今までと変わらず学校へ行き、みんなと楽しく笑って過ごし、放課後は部活動。お稽古事や塾もある。その後に、スーパーへ買い物に行き、何となく好きなものを選んで家に帰ってご飯を作る。在り来たりのものしか作れないけれど結構満足していた。

洗濯もする、弟の行事の日にはお弁当も作る。僕はスーパーマンになったようだった！お父さんも助けてくれた。キッチンのリフォームに家電は便利なものを揃えてくれた。

衣類乾燥機も設置された。それはガス製品で乾くのが断然早いんだって。

そんな風子供ながらに目まぐるしい毎日は、あつという間に過ぎて僕は中学3年生になった。

試験があつて順位表をもらった時、僕はビックリした。自慢じゃないけど中学生になつていつも1番を取っていた僕だから、結構余裕で見た瞬間、その数字は100番になつていた。ショックよりも先に、ピッタシ100番って凄くない!?と思った。

そりゃ、そうだよ、子供ながらに時間がな過ぎるよ。また、ちゃんと勉強すれば取り返せる自信もあつた。それなのに、担任の先生は大袈裟にも親を呼んだ。お父さんに言うとな怒られるから、こんな時だけ都合よくお母さんに来てもらうことにした。ちょっと叱られて直ぐに終わるかと思つたら、予想に反して母親は先生に「私の所為なんです。私たち夫婦は別居をして、この子に負担を掛けている。」と涙ぐむ有り様だ。

そんなこんなで、担任の先生は怒るどころか「何か困つたことがあれば何でも相談しろよ。」と優しい言葉を掛けて、肩を叩く。あ〜、僕は格好悪いと思つてしまった。友達たちとも毎日笑つて過ごしていたから誰も気づかなかつたのに…。

でも、その頃から僕の中にもう一人のボクが現れた。話を聞いてくれているような、どんな時も諦めない気持ちにしてくれる親友のような。それに、お父さんとお母さんを戻せると信じている僕に、ボクは明るい未来ばかりを想像させてくれた。どんな奇跡も起こせると思わせてくれたんだ。時々、すごく寂しくなつたり不安な時、いつも大丈夫だと寄り添つてくれている。

こうして僕とボクの二人三脚が始まつた。これは揺るぎない関係で結ばれた絆なんだ。

人生のあらゆる場面で、奇跡も起こしてくれる頼り甲斐のあるボクは、まるで小っちゃな神様みたいだ。迷つた時も、瞬間的に好きな方を選ぶことを教えてくれた。人を信じる力も、僕は自分（ボク）を信じているから、その僕が信じる人なら大丈夫だと。先ずは僕から先に、心を開いて本音で相手に向き合えば心配ないと。心はきっと繋がるよ。そうして繋がつた人たちは、人生の楽しさを教えてくれる。

僕が本当にやりたいことをやつた時、そこは楽しくて仕方ない舞台が用意されている。それはどんな誰にでも、自分の人生の舞台があつて、みんな主役なんだよね。不安も恐れもない。とても心地良い場所なんだ。

自分を生きるつてことは、実はとても楽なことなんだ。みんな思い出して欲しい、素直になつてもいいんだと。どんな時も、もう一人の自分が味方でいてくれるはずだから。

[以上となります。よろしくお願ひいたします]